

15 世紀南アジアにおけるイスラーム学術とペルシア語文化

Islamic Intellectual Tradition and Persianate Culture in Fifteenth-Century India

二宮文子

NINOMIYA, Ayako

・概要

本研究では、14 世紀末から 15 世紀にかけての北インドのペルシア語文化の状況を明らかにすることを目的に、シャルキー朝（1394-1479 年）の都ジャウンプルで活動したイスラーム知識人、シハーブッディーン・ダウラターバーディーの 2 つの作品、『波打つ大海』と『サイイドたちの美德』を取り上げた。『サイイドたちの美德』に関しては、学術誌『東洋文化』と『西南アジア研究』に日本語の論考二点が掲載された。後者の論考に関しては、2023 年 5 月 31 日にアルメニアにて開催された国際学会で行った発表と共通する内容である。これらの論考と発表では、『サイイドたちの美德』の概要の紹介や各地の所蔵写本の調査を行い、さらに同作品の中で言及されている作品名 120 点をリスト化し、それらの作品の同定を試みた上で、14 世紀の北インドのイスラームの学術伝統との継続性と、ダウラターバーディーの新規性について論じた。『サイイドたちの美德』は未刊行であり、今後はテキストの刊行に向けて校訂テキストを作成していく予定である。『波打つ大海』は大部のクルアーン注釈であり、一部しか出版されていない。本研究では、基礎的作業として、欧米やインド、パキスタンにおける『波打つ大海』の写本の所蔵状況を写本カタログを用いて調査し、30 点ほどの写本の存在を確認した。また、出版テキストについてはオンラインで PDF データを、一部の写本についてはマイクロフィルムのデジタルデータを入手した。入手できたデータは作品の全体をカバーしているわけではないが、今後テキスト全体の入手を試み、また、これまでに入手できたテキストをもとに、『サイイドたちの美德』に見られるクルアーンの章句の解説との関連性の分析を進める予定である。

1. 研究の背景

前近代の南アジアにおいては、イスラーム法学、神学、文学などの諸学が盛んに行われており、また、南アジアは行政や文学においてペルシア語を用いるペルシア語文化圏の重要な一角であった（近藤信彰（2000）『イラン、トゥラン、ヒンド——ペルシア語文化圏の発展と変容』『岩波講座世界歴史14 イスラーム・環インド洋世界 16-18世紀』、岩波書店、93-114頁、森本一夫（編）『ペルシア語が結んだ世界——もう一つのユーラシア史』、北海道大学出版会、2009年）。南アジアのイスラーム学術の伝統は8世紀初頭のウマイヤ朝によるスインド征服、ペルシア語文化の歴史は11世紀後半からのガズナ朝のインド北西部進出に起源を持ち、13世紀初頭に成立したデリー・サルタナト時代に大きな発展を見たのち、ペルシア語を公用語としたムガル帝国時代に最盛期を迎えた。特にムガル帝国時代のペルシア語文化については、サンスクリット語作品のペルシア語訳などに関する研究が世界的に盛んである（Truschke, A. *Culture of Encounters: Sanskrit at the Mughal Court*. New York: Columbia University Press, 2016）。一方、ムガル帝国時代以前のペルシア語文化やイスラーム諸学の状況、特に14世紀末のトゥグルク朝の崩壊から16世紀のムガル帝国の成立までの間に各地に成立したムスリム王朝下での状況については、アラビア語作品のリストなどの基礎的な研究がある他、まだ数は少ないが、各地域独自の文化の様相、特にペルシア語の文学を背景の一つとして発展した在地語を用いた文芸活動や、ペルシア語を通じた広域交流に注目して宮廷文化を扱った研究も出ている（Orsini, F. and Sheikh, S. (eds.) (2014) *After Timur Left: Culture and Circulation in Fifteenth-Century North India*. New Delhi: Oxford University Press; Flatt, E. J. (2019) *The Courts of the Deccan Sultanates: Living Well in the Persian Cosmopolis*. Cambridge: Cambridge University Press）。ただし、これまでの研究で取り上げられてきた文化は文学や宗教（イスラームでは特にスーフィーの活動）が中心であり、15-16世紀南アジアのイスラーム諸学についての具体的な検討や、イスラーム諸学の実践とペルシア語文化の関連に注目した研究はほぼ見られない。本研究は、このような間隙を埋めるべく、15世紀北インドで活動したウラマー（ムスリム知識人）、シハーブッディーン・ダウラターバーディー（1444-5年没）のペルシア語作品から、その学術的背景を分析することを目的とする。

シハーブッディーン・ダウラターバーディー（1444-5年没）は、北インドのシャルキー朝（1394-1479年）の都ジャウンプルで活動し、この時代を代表するウラマーとして南アジアの外でも名前を知られていた。また、彼はアラビア語だけではなくペルシア語でも多くの著作を残しており、当時の南アジアのペルシア語によるイスラーム諸学の状況を分析するための対象として適切である。シャルキー朝時代に関する叙述史料や伝記史料の乏しさ故、彼や彼の作品に関する研究は、百科事典項目やシャルキー朝の概説的研究の中に含まれる基礎

的な伝記情報と作品タイトルの確認という状況にとどまっており、個別の論考も見られない (Hussain, S. E. (2017) *Shiraz-i Hind: A History of Jaunpur Sultanate*. New Delhi: Manohar; Nizami, K. A., al-Dawlatābādī. In: *Encyclopaedia of Islam*, 2nd. Brill; Saeed, M. M. (1972) *The Sharqi Sultanate of Jaunpur: A Political & Cultural History*. Karachi: University of Karachi.)。彼の作品についても、テキストが出版されているのは4点のみである。本研究では、南アジアのペルシア語文化という文脈から注目すべき作品である『サイイドたちの美德』(Manāqib al-Sādāt) と『波打つ大海』(Baḥr al-Mawwāj) の二点を取り上げ、写本の所蔵状況や作品の基礎的な情報、テキストの検討などを行い、南アジアのペルシア語によるイスラーム学術の歴史におけるそれらの作品の位置付けについての理解に繋げる。

2. これまでの成果

・史料調査と研究発表の概要

『サイイドたちの美德』は未刊行の作品だが、別のプロジェクトでの活動を通してすでに複数の写本を確認・入手してきた。これまで32点の写本の存在を確認し、13点を実見した上で、テキストの質が良いと判断した2点の写本を元に研究の基礎となるテキストを作成済みである。2023年度には、このテキストを元に『サイイドたちの美德』の内容分析を行なった日本語論考2本が学術誌に掲載された(「ダウラターバーディー作『サイイドの美德』に見る南アジアのインド・イスラーム文化」『東洋文化』103巻、2023年3月、55-73頁; 「15世紀北インドにおけるインド・イスラームの学術伝統: ダウラターバーディー作『サイイドたちの美德』を通して」『西南アジア研究』96巻、2023年6月、16-37頁)。また、2023年5月31日には、本プロジェクトの助成金を利用して、ペルシア語文化に関する国際学術団体 The Association for the Study of Persianate Societies が主催した国際学会に参加し、口頭発表も行なった(“From Delhi to Jawnpur: Shihāb al-Dīn al-Dawlatābādī’s *Manāqib al-sādāt*,” The Association For The Study of Persianate Societies 9th Biennial Convention, May 30-June 3, 2023, The Institute of Oriental Studies, Russian-Armenian (Slavonic) University, Yerevan, Armenia, May 31, 2023)。なお、今後、未見の写本のうちアクセスが比較的容易と考えられる大英博物館所蔵写本などを確認し、校訂テキストの作成を進める予定である。

『波打つ大海』は、ペルシア語による『クルアーン』注釈である。1880年にラクナウで出版された石版本があり、ボードリアン図書館のサイトからPDFを入手することができた(Dawlatābādī, Shihāb al-Dīn Shams, *Baḥr al-Mawwāj* vol. 1. (ed.) Ghālib Lakhnavī, Muḥammad Ṣādiq ‘Alī. Lakhnaw : Nawal Kishawr, 1880)。ただし、この刊本はクルアーンの6章終わりまでの注釈を取録した1巻のみで刊行が止まっている。この分量はクルアーン

ン全体の5分の1程度をカバーするのみであり、『波打つ大海』全体の分量から見ても3分の1に満たない。また、石版本は複数写本を検討して作成した校訂テキストではない。したがって、作品全体の内容を確認するためにも、また既出版部分のテキストの検討のためにも、良質な写本を入手する必要がある。本研究では、写本が入手できる可能性が高いヨーロッパ、アジア諸国の主要図書館の所蔵状況の把握を目指し、ペルシア語作品の網羅的カタログである Storey の *Persian Literature: A Bio-bibliographical Survey* (London: Luzac, 1970-)、インド共和国ラームプルのラザー図書館のペルシア語写本カタログ (*Catalogue of Persian manuscripts of Rampur Raza Library* vol. 1-3. Rampur: Raza Library, 1996-2000)、インド共和国アリーガル大学マウラーナー・アーザード図書館のオンライン写本検索システムなどを用いて、『波打つ大海』写本の所蔵を確認した。これらの調査の予備作業は特別研究員が担当した。また、2023年7月から8月にかけてインドの現地調査を行った際に写本の調査・収集を試みた。

・『サイイドたちの美德』について

『サイイドたちの美德』は、神学や法学、ハディース学などの先行作品の内容に基づいて、サイイド(預言者ムハンマドの子孫の総称)の尊さを論じる小作品である。サイイドの尊さ、宗教的特権を論じる際にアラビア語ではなくペルシア語を用いるという言語選択は、南アジアだけではなく、当時ペルシア語が流通していた地域においても新たな試みであったと言える。ただし、『サイイドたちの美德』の主要な議論はペルシア語で追うことができるが、それらの論拠という位置付けにあるアラビア語部分も全体の4分の1から3分の1程度の分量があり、また、先行作品の単なる再生産ではない可能性もある。このような性質から、『サイイドたちの美德』は、従来イスラームの学術語として用いられてきたアラビア語に加えて、ペルシア語が学術語としての地位を獲得しはじめた過渡期の作品であると位置付けることができる。本作品の特徴としては、このようなペルシア語文化史上の位置付けに加え、従来シーア派が主導してきたサイイド崇敬に関する議論において、スンナ派性を強調している点が挙げられる。シーア派においては、サイイド崇敬は、イスラームの中での預言者ムハンマドの特権的な位置付けに加え、シーア派の指導者たるイマームの宗教的優越を背景に語られることが多い。しかし、スンナ派性を強調する『サイイドたちの美德』の中では、シーア派の理論書で培われてきた抽象的イマーム論は当然ながら見られず、一般的なクルアーン注釈やイスラーム法学、さらに例え話や先人の逸話を用いて、ムハンマドの子孫たるサイイドを大切にすることが宗教的救済につながるという主張が繰り返し説かれている。『サイイドたちの美德』内のこのような議論は、ムガル帝国時代以降に顕著になった、南アジア社会におけるサイイドの特権や文化的価値づけの理屈が明確に文章化されているという点で非常に興味深

いものである。

以下、『サイイドたちの美德』の南アジアのイスラーム学術史上の位置付けについて、『西南アジア研究』掲載論文と、The Association for the Study of Persianate Societies の国際コンベンションでの口頭発表の内容を元に説明する。『サイイドたちの美德』は、クルアーンの章句やハディース、神学や法学の議論を用いてサイイド崇敬の正当性を論じるという作品の性質上、多くの先行作品が言及・引用されている。このような作品の特徴、また、作者ダウラターバーディーが同時代のイスラーム学者の中で高い評価を受けていたという点から、『サイイドたちの美德』中に登場する先行作品を同定し、14 世紀までに南アジアで流通していた作品との共通点や相違点を分析することによって、15 世紀北インドのイスラームの学術の特色、また南アジアのそれまでの学術伝統との連続性あるいは断続性を理解できると考えた。作中では、参照作品名は現在知られている（正式）名称ではなく通称で呼ばれていることも多く、作品の特定にはやや困難が伴うが、既存の文献リスト類を用いて 120 点中 80 点程度を推定した。また、推定の結果を、14 世紀前半と後半に活動したスーフィーに関連する文献リスト 2 点 (Ernst, C. W. (2004) *Eternal Garden: Mysticism, History, and Politics at a South Asian Sufi Center* (2nd ed.). New Delhi: Oxford University Press, pp. 251-263; Steinfels, A. M. (2012) *Knowledge before Action: Islamic Learning and Sufi Practice in the Life of Sayyid Jalāl al-Dīn Bukhārī Makhdūm-i Jahāniyān*. Columbia: University of South Carolina Press, pp. 181-190) と比較し、14 世紀から 15 世紀にかけて継続的に参照されている文献名を特定した。

このような分析の結果、『サイイドたちの美德』の中で頻繁に言及されている作品の多くは、ザマフシャリー (Abū al-Qāsim Maḥmūd b. ‘Umar al-Zamakhsharī, d. 1144) によるクルアーン注釈 *al-Kashshāf ‘an Ḥaqā’iq al-Tanzīl* や、インドのハディース学最初期の成果とされるサガーニー (Raḍī al-Dīn al-Ḥasan al-Saghānī, d. 1252) の *Mashāriq al-Anwār al-Nabawiyya*、アブルバラカート・ナサフィー (Ḥāfiẓ al-Dīn Abū al-Barakāt al-Nasafī, d. 1310) のクルアーン注釈 *Madārik al-Tanzīl* など、14 世紀から南アジアでよく知られていた作品であることが明らかになった。また、従来南アジアで優勢であったとされる神学派マートゥリーディー派、法学派ハナフィー派の作品が多く参照されており、『サイイドたちの美德』やダウラターバーディーの学術が、14 世紀までにデリー周辺で蓄積された学術伝統と共通していることが明らかとなった。なお、ハルグーシー (Abū Sa’d ‘Abd al-Malik b. Muḥammad al-Khargūshī al-Naysābūrī, d. 1015-6) によるアラビア語作品（あるいはラーワンディー (Maḥmūd b. Muḥammad al-Rāwandī) によるペルシア語訳（12 世紀末～13 世紀初頭成立））と推察される *Sharaf al-Nubuwwa* の頻繁な利用は、南アジアの既存の学術伝統ではあまり参照されてこなかった文献を、論じるテーマに従って利用したものと推察される。

今回のプロジェクト期間中には、『サイイドたちの美德』中に見られる19篇の詩の作者の特定を試みた。19篇中7篇はアラビア語、12篇はペルシア語であり、アラビア語の詩とペルシア語の詩の数の比率は、作品のテキスト全体の言語比率とほぼ同じである。調査の結果、アラビア語の1篇については、2篇が法学者としても名高いシャーフィイー (Imām al-Shāfiʿī, 767-820) の詩、1篇が7世紀のアラブ詩人タミーミー (Hammām b. Ghālib al-Tamīmī, 641-ca. 730) 通称ファラズダク (Farazdaq) のカスィーダと判明した。その他、Ḥammād (Jamāl) b. ʿAlqama という作者名、あるいは *al-Lāmiyya* という作品名が挙げられている詩もあるが、既存の研究・文献との照合には至っていない。一方、ペルシア語の12篇については、以下の通り9篇の作者が特定できた。

シーラーズで活動した著名な詩人サアディー (Saʿdī Shīrāzī, 1210-1291/2) : 2篇

現在のアゼルバイジャンに位置するシルヴァーン地方生まれの詩人ハーカーニー (Khāqānī, Afḍal al-Dīn, 1120-1190)

インド滞在歴がある詩人ファフルッディーン・イラーキー (Fakhr al-Dīn ʿIrāqī, 1213/4-1289)

アナトリア半島で活動したスルターン・ワラド (Sulṭān Walad b. Jalāl al-Dīn Rūmī, ca. 1227-1312)

デリー・スルターン朝時代の著名な詩人アミール・ホスロー (Amīr Khusraw, 1253-1325)

アゼルバイジャンのスーフィー詩人アウハディー・マラーガイー (Awḥadī Marāghaʿī, 1274/5-1338)

イランのケルマーンで生まれシーラーズで没したハーजू・ケルマーニー (Khwājū Kirmānī, 1290-1349)

ニウマトゥッラー教団の祖としても知られるニウマトゥッラー・ワリー (Niʿmat Allāh Walī, ca. 1331-1431)

アラビア語に関しては古典が、ペルシア語に関しては古典から比較的時代の近い作者まで幅広い作品が引用されている。特定できたペルシア語詩の作者はムガル帝国時代にもよく読まれていた詩人であり、ペルシア語文化圏の中で広く共有されていたスタンダードな作品が引用されていると言える。

・『波打つ大海』について

『波打つ大海』は、南アジアで初めて書かれた、ペルシア語による『クルアーン』全編への注釈書である。この作品については、ペルシア語によるクルアーン理解の歴史を取り上げた書籍の中でも注目されているものの、前述した通り全体のテキストが出版されてい

ないこともあり、内容の具体的な検討はほとんど行われていない (Zadeh, T. (2012) *The Vernacular Qur'an: Translation and the Rise of Persian Exegesis*. New York: Oxford University Press.)。

すでに述べた通り、この作品については、『クルアーン』1章から6章までに対する注釈を収録した刊本のPDFを入手済である。また、2023年8月3日と4日に訪問したデリーのヌール・マイクロフィルムセンターにて、下記二点の写本のマイクロフィルムのデジタルデータを入手した。

1. 1681/ 1718, Daira Adabiyat urdu, Hyderabad, India (Juma al-Majid Center for Culture and Heritage, Dubai, UAE 所蔵、1289/ 1872-3 年筆写、264ff)
2. Iran Cultural House, 133-2 (Aligarh Muslim University 写本、ff. 264 ~ (全 194 フォリオ)

写本1は『クルアーン』冒頭から2章終わりまで、写本2は29章43節～114章終わりまでに対する注釈が含まれている。なお、データの元になったマイクロフィルムの状況の悪さやデジタルデータの解像度の低さから、両方とも全体に文字が読み取りにくく、読解には困難が伴う。

写本については、下記の通りカタログ調査を通して28点の所蔵が確認できた。

ロンドン、大英博物館 (3点：6章まで、18章まで、19-64章)

インド共和国ハイデラーバード、アーサフィーヤ図書館 (3点：うち1点は完全本)

インド共和国パトナ、ホダーバフシュ図書館 (3点：うち1点は完全本?)

エジプト共和国カイロ (1点)

パキスタン共和国ベシャーワル (1点：38-64章)

インド共和国アリーガル大学、マウラーナー・アーザード図書館 (9点：うち2点は完全本)

インド共和国ラームプル図書館 (8点)

現在までに入手できたテキストは全体の半分強の分量に過ぎない。作品の適切な分析のためには、まずテキスト全体を入手する必要があると考えられる。今後、完全本の写本が所蔵されているアリーガル大学図書館、パトナのホダーバフシュ図書館を訪問し、写本を実見する機会を作りたい。カタログ類を用いた写本調査も引き続き継続する。

・『サイドたちの美德』におけるクルアーン章句利用

本研究で『波打つ大海』を利用する第一の目的は『サイドたちの美德』に見られる『クルアーン』の章句への解説と『波打つ大海』の内容の関連性についての分析である。この分析の予備作業として、『サイドたちの美德』中に引用されているクルアーンの章句を探してリスト化し、現在入手できた『波打つ大海』の対応部分を確認した。

これまでに、『サイイドたちの美德』中に引用されている『クルアーン』の章句として43箇所が特定できている。複数回引用されている章句のうち、3章61節「さあ、わたしたちの子孫とあなたがたの子孫、～(中略)～祈ろう」(3回)については、『波打つ大海』石版本テキストで該当箇所の注釈を確認できた。この章句に対する解説の中では、預言者ムハンマドがメディナにおいてキリストの神性をめぐってキリスト教徒と論争し、虚偽を主張した場合には呪われるという誓いをたてたという逸話が示されている。この誓いの際に、ムハンマドは娘のファーティマ、その婿でシーア派の初代イマームであるアリー、二人の間の息子ハサンとフサインを外套の下に入れたという伝承(ハディース)があることから、これらの人々は「外套の人々」と呼ばれ、預言者一族に含まれる人々の間でも特に尊いとみなされている。この伝承と逸話はシーア派の間では非常に重要視されており、スンナ派も『クルアーン』の3章61節が啓示された際の状況として『クルアーン』注釈の中でしばしば取り上げている。その他、特に頻出する章句のうち、33章33節(4回)は清浄の句、42章23節(3回)は愛情の句とも呼ばれる。一般に、前者は預言者一族(「お家の人々」)の宗教的な清浄性の根拠、後者は預言者一族を近親のように扱うことによって神の報いが得られるという主張の根拠として解釈されている章句である(新井和広「現代インドネシアにおける預言者一族の位置付け」『東洋文化』103巻、2023年3月、75-104頁)。『サイイドたちの美德』の中でこれらの章句が多く言及されているのは、作品の主題からも自然なことである。33章33節に関しては、ヌール・マイクロフィルムセンターで入手した写本データ2(アリーガル所蔵写本)のテキストから、ダウラターバーディーがこの章句をファーティマ、アリー、ハサン、フサインの「聖家族」に結び付け、彼らの清浄性の説明と位置付けていることが確認できた。

以上の検討を通して、ダウラターバーディーは、『クルアーン』注釈である『波打つ大海』においてもサイイド崇敬を一貫して重視していること、また、『サイイドたちの美德』においては明示的に説明されていないが、サイイド崇敬に関連づけられてきた『クルアーン』の章句を作中で選択的に用いていることが明らかとなった。今後、『波打つ大海』のテキスト全体を入手し、『サイイドたちの美德』で参照されている章句全ての解説を確認することや、先行するスンナ派のクルアーン注釈の内容との比較を進めていきたい。